

# 確率の意味論における論理説からみる ケインズの「アニマルスピリット」の含意

尹 清 洙

## I はじめに

アダム・スミス(Adam Smith, 1723-1790)の『国富論』、カール・マルクス(Karl Marx, 1818-1883)の『資本論』及びジョン・メイナード・ケインズ(John Maynard Keynes, 1883-1946)の『雇用・利子および貨幣の一般理論』(以下では『一般理論』と省略)は経済学の三大古典と呼ばれている。スミスの『国富論』の認識論としては『道徳感情論』があり、マルクスの『資本論』の哲学基礎には唯物弁証法がある。そしてケインズの『一般理論』の前提には『確率論』という認識論と方法論がある。

本稿の目的は確率の意味論からケインズの『確率論』を取り上げ、ケインズの哲学思想と経済学の方法論の関係について検討することである。

本稿の構成は以下の通りである。まず第Ⅱ節において、確率における意味論の種類について簡単に整理し、ケインズの論理説がどのような位置づけにあるかを確認する。第Ⅲ節ではケインズの『確率論』における論理説の中身を詳しく検討し、同時にラムジーの批判を取り上げながら、その論理説の持つ意義とその限界について考察する。そして第Ⅳ節では『一般理論』の理論的枠組みとそのエッセンスを取り出す。最後の第Ⅴ節では、本稿の結論をまとめる。

なお、本稿はスミスの認識論の研究(尹・2016)に続く、経済思想研究の第二弾としての性格を有するものである。

## II 確率論における意味論の分類

確率論の数学理論は1654年のブлез・パスカル(Blaise Pascal, 1623-1662)とピエール・ド・フェルマー(Pierre de Fermat, 1607-1665)の書簡によって提起され、1713年のヤコブ・ベルヌイ(Jakob Bernoulli, 1654-1705)の『推測術』で重要な進展がなされた。そして1812年に出版されたピエール＝シモン・ラプラス

（Pierre-Simon Laplace, 1749-1827）の『確率論：確率の解釈的理論』により、確率論は数学の主要な一分野として確立された。さらに1933年に、アンドレイ・ニコラエヴィッチ・コルモゴロフ（Andrei Nikolaevich Kolmogorov, 1903-1987）が『確率論の基礎概念』で公理主義的確率論を立脚させ、確率論は高度な数学として独立した地位をもつようになった。この公理的確率理論において、確率の本質的な解釈は行なわれない。

他方、確率論の意味論において、本質的に事象や確率とは何かが問われる。その回答には大局的に主観主義と客観主義からの2種類の異なる解釈が行われ、長い間激しい論争が繰り広げられており、今でもその論争が収斂されたとは言い切れない（大塚（2020）では、プラグマティズムとして収束に向かっているという理解を示している）。

確率の主観的解釈は、確率を人間の直観、知識や信念に関係するものと考え、このアプローチでは確率は、知識の度合いや合理的信念の度合い、信念の度合いなどを示す尺度であり、論理説、主観説などがある。

確率の客観的解釈は、確率を人間の知識や信念とは関係のない客観的物質世界の性質として捉え、頻度説、傾向説などがある。

### 1. 論理説

論理説は、1920年代に経済学者ケインズにより提案され、1930年末に地球物理学者ハロルド・ジェフリーズ（Harold Jeffreys, 1891-1989）、1950年代に科学哲学者ルドルフ・カルナップ（Rudolf Carnap, 1891-1970）によってもっと精緻化された。論理説において、確率は知識と仮説間の論理的に計算可能な関係であり、論理学の一部門として分析が行われる。

### 2. 主観説

主観説は、ケインズの論理説に対して、その弟子であるフランク・プランプトン・ラムジー（Frank Plumpton Ramsey, 1903-1930）の批判によって提起されたものであるが、同時期にイタリアの統計学者ブルーノ・デ・フィネッティ（Bruno de Finetti, 1906-1985）も論理的ベイズ主義の難問を克服しようとして、確率の操作的主観的概念を考案した。主観説において、確率は該当の事象に対する認識主体の確信の程度を表し、コンピュータの計算性能の向上に伴って急速に復興しつつあるベイズ統計学の基礎的概念である。

### 3. 頻度説

経済学者フランシス・イシドロ・エッジワース（Francis Ysidro Edgeworth, 1845-1926）と論理学者ジョン・ベン（John Venn, 1834-1923）などによって改良

された頻度と関連する統計的確率は、ケインズの批判の対象であったが、1920年代に科学哲学者ハンス・ライヘンバッハ（Hans Reichenbach, 1891-1953）と科学者のフォン・ミセス（Richard von Mises, 1883-1953）によって厳密に定式化され、今日の数理統計学の基礎として確立された。頻度説において、確率はある事象が起きる頻度の観測結果に基づいて、無限回繰り返した際の極限值としての相対頻度を表し、頻度的確率論は数学的演繹科学として取り扱われる。

#### 4. 傾向説

確率の傾向説は1957年に哲学者カール・ライムント・ポパー（Karl Raimund Popper, 1902-1994）が提唱したものである。ポパーは確率の客観説を支持し続けたが、頻度説では、単一事象の客観的確率を与えられないなどの限界があるので、新しい客観説を模索し、傾向説を提示した。その後、様々な一連の傾向説が提案されたが、傾向説において、確率は多様な解釈があり、ある種の性質である傾性や単一ケース確率などを意味する。

なお、確率論における意味論の上記の分類以外にも、例えばD.ギリース著・中山訳（2004）では間主観的確率などが登場し、また、ティモシー・チルダーズ著・芦屋訳（2020）では最大エントロピー原理などが紹介されている。

### Ⅲ ケインズの『確率論』における論理説とラムジーの批判

#### 1. ケインズの確率論

ケインズの『確率論』は1921年に出版されたが、五部三十二章からなっている。

第Ⅰ部の「基礎的諸概念」は、この本の全体のテーマと自分の考える確率概念の基本的な特徴を説明する部分であり、ケインズの確率理論と科学的分析方法のエッセンスが示されている。すなわち、「確率－関係」という論理的確率の概念を定義し、それがどの程度まで測定できるものであるかを論じている。頻度確率とは異なり、論理確率では、非数値的確率が受容可能であり、多くの異質の順序系列が存在する。そのため、論理的に比較が可能な場合と比較できない場合があるとされる。

第Ⅱ部の「基本定理」では、第Ⅰ部で説明された確率について、それを記号論理学の形式で体系化し、演繹推論の論理体系の一部として説明している。まず、確率関係、确实性の関係、不可能性の関係などの定義から出発し、等値の公理などの公理から、必然的推理の基本定理、蓋然的推理の基本定理などを導出する。また、逆確率ならびに平均に関する問題を取り上げながら、自分の方法論の正当化を行っている。

第Ⅲ部の「帰納と類比」では、確率は論理学の中で合理的ではあるが確定的ではない推論を扱う部分からなると述べたうえで、経験の一般化のための帰納的推論が前提すべき、論理的原則について分析する。非演繹的推理の一つの方法としての帰納的推論には、類比と純粹帰納の二種類があり、それぞれの原理について検討しながら、その核心が類比にもとづく点にあることを論じている。

第Ⅳ部の「確率の若干の哲学的適用」は、ケインズの確率論が帰納法をめぐる歴史上の様々な哲学的問題に対してもつ意義、とくに偶然をどう捉えるかについて論じる部分である。

まず、ケインズは偶然について次のように定義した。

「「偶然」という用語は、考慮されている事象と前提されている事象とが同時に起こることについてわれわれがもっている情報の状態にむしろ関係がある。もし硬貨投げの次第についてのわれわれがもっている知識が、可能な二者択一的な結果にたいしてわれわれが抱く予想に無関連であるならば、硬貨の表が出るか裏が出るかは偶然事象である。」<sup>1</sup>

次に、その偶然を主観的偶然と客観的偶然に分けて、次のように説明している。

「一般に、二つの事象のうちの第1の事象の知識が、第2の事象に対するわれわれの予想に無関連であり、しかも、その予想を支持するあるいはそれに反対する追加的な見込みを生み出さないとき、すなわち二つの事象の知識を主張する命題の確率が第12章第8節において定義された意味で独立であるとき、それら二つの事象の関連は、主観的な意味で偶然であるといつてよい。」<sup>2</sup>

「次のような場合に、ある事象の生起は客観的偶然によるといつてよいと思われる。すなわち、それが上述の意味において偶然事象であるばかりでなく、ある一定の種類さらなる知識が仮に得られるとして、それをさらに付け加えても、その偶然の特性が影響を受けないであろうと仮定するに足る適切な理由が存在するときである。すなわち、現実の知識に関してではなく、ある一定の種類知識全体に関する確率を考慮しなければならない。…ある種類の物事についてのわれわれの知識がどんなに完全であろうとも、もし検討中の命題の連言を構成する命題の間になお独

1 ケインズ著・佐藤訳（2010）、332頁。

2 同上

立性が存在するならば、そのとき、それらの命題の間に実際にみられる連言は偶然によるという意味で客観的な意味があるといつてよいであろう。<sup>3</sup>

すなわち、最も広義の意味の主観的偶然を定義した後、主観的偶然の特殊なケースとして客観的偶然を取り扱い、完全な知識すらも命題の間の独立性を変化させないならば、その偶然は客観的意味を持っているとした。そのうえで、「本書の方法は、主観的確率を基本的なものとみなし、その他すべての重要な関連をもつ概念はそれから導かれるものとして扱う」<sup>4</sup>と明言している。

第V部の「統計的推理の基礎」では、統計的推論における確率の使用について論じた。まずはベルヌーイ、ポアソン及びチェビシェフによる統計的頻度を予測するための事前確率の利用と、ラプラスによる事後確率を算定するための統計的頻度の数学的利用について、それぞれ批判的に検討している。

このようにケインズの『確率論』は全体として、ライブニッツのアイデアを継承した確率概念の定義、その形式的体系化を試みた前半部分（第I部と第II部）と帰納的推論の正当化を試みることでヒュームの懐疑論に挑戦する後半部（第III、IV、V部）の大きく二つの部分で構成されている。

「若き日の信条」（1938）のなかで、ケインズは次のように述べている。

「われわれにとっては、つまり一九〇三年に活動家だった者にとってのみ、ムーアの影響がマクタガート、ディッキンソン、ラッセルを完全に駆除していた。その影響は単に圧倒的であったばかりではない。それはストレーチーがいつも不吉な (*funeste*) と呼んでいたものとは正反対なものであった。それは胸をわくわくさせ、人を陽気にするものであり、ルネッサンスの幕あき、新しい地上における新しい天国の出現であった。」<sup>5</sup>

ここから分かるように、ムーアの有機的倫理学がケインズの認識論にかなり重要なインパクトを与えたことが伺える。同時に、ケインズはラッセルの『数学原論』が『倫理学原理』という「素材について論じるための方法を提供した」<sup>6</sup>と回想した。

また、山崎（1988）では、ケインズの『確率論』について次のように論じている。

3 同上書、332-333頁。

4 同上書、325-326頁。

5 ケインズ著・大野訳（1980）、568頁。太字は筆者。

6 同上書、572頁。太字は筆者。

「既にケインズの確率は、論理的推論であると同時に認識論であることを述べてきた。これは基本的に「善い」がオルガニックであることにその緒端、根拠をみつけることができたと言える（最近出版された『ケインズの方法』の著者、カラベリ（A.M. Carabelli）もケインズとラッセルの相違は、オルガニズムとアミズムであると言っている。）。このオルガニズムな見方は観点を換えればムーアの倫理学、直観からきていることも事実である。そのことからケインズの確率を帰結的推論よりは認識論で、別な言葉でいえば、論理学よりは存在論で見ることができる。否むしる彼は後者の立場に立っていたと言った方がよいように思う。とにかくケインズの経験主義は、イギリスの中でも特異な存在にあるといえる。」<sup>7</sup>

筆者は、ムーアの『倫理学原理』における「有機的統一性の原理」がオルガニズムで、ラッセルにおける『数学の原理』がアトミズムであるならば、ケインズの『確率論』はオルガニズムという認識論（哲学的総合）を基礎としたアトミズム的方法論（科学的分析）であると認識している。

すなわち、ケインズの『確率論』における研究対象は、知識の重要な源泉の一つである人間の直感や信念であり、その出発点は人間の主観的認識に関するものであった。しかし、それは非合理的な信念を取り除いた合理的信念への接近であり、その推論のプロセスにおいては論理的客観性を追求したのだ。

## 2. ラムジーの『真理と確率』（1926）とケインズ批判

ケインズの『確率論』は、「確率－関係」という確率概念の定義とその形式的体系化を試みた前半部分、演繹的な論理を帰納的な場合に拡張することで帰納的推論の正当化を試みる後半部で構成されているが、ラムジーにより徹底的な批判を受けた。ラムジーの批判は、ケインズの確率概念から方法論に至るまで全面的なものであった。

『真理と確率』は「(一) 頻度説」、「(二) ケインズ氏の理論」、「(三) 信念の度合い」、「(四) 整合性の論理」、「(五) 真理の論理」の全部五節で構成されている。

第一節では、まず頻度説の有利な諸点を取り上げながら、純粋数学の一分野として発展してきた頻度論は統計理論や統計力学などの現代科学において非常に有用であることを積極的に認めている。

そのうえで、自分の論文ではケインズと同じく、「さしあたって頻度説を度外視

---

7 山崎（1988）、59-60頁。

し」、確率のもう一つの側面である「部分的信念の論理」の論理説について探求することを表明している<sup>8</sup>。

第二節では、「ケインズ氏の理論」を取り上げながら、確率概念の定義、整合性の問題などについて辛辣な批判を展開している。

まず、命題間の「確率-関係」というケインズ概念について、そのような関係は存在せず、一方の命題だけを想定して、その一方の命題にどれだけの度合いの信頼をおくべきかと確率の定義を与えている。すなわち、ケインズの確率概念には、「命題間の論理的関係」と「帰結（一方の）命題を信じるべき合理的な度合い」という二つの側面があったが、ラムジーは前者を否定し、後者だけを認めている。

そして、ケインズの『確率論』の第二章十二節の表現を用いながら、ケインズの「第一の諸原理に関する議論においてさえ」、主観性と客観性をめぐる曖昧な不整合性が存在すると指摘している<sup>9</sup>。

第三節では、ラムジーの確率概念の定義から選好（効用）理論の論理的展開が行われている。ラムジーは「我々がある意味ではそのすべての生の局面で賭けを行っているのだ」<sup>10</sup>と述べながら、「賭け」のモデルを用いて、「数学的期待値」を計算する数学的方法で、確率概念を部分的信念の度合いの論理としての「整合性の理論」を緻密に構築した。また、「ダッチ・ブックの定理」を用いて、人間の合理性の根本的な条件を明確に提示した。

第四節では、演繹的推論と帰納的推論の相違点について論じながら、ケインズの確率論における演繹的な帰納の正当化の方法論を批判した。また、第三節で自分が提示した確率の「整合性の理論」の形式的論理性と合理性を主張している。

まず、次のように述べながら、ケインズの演繹的論理を帰納的な場合に拡張したものとされる主張について異議を表明した。

「論証と推論の学としての論理学は、伝統的に演繹的なものと帰納的なものとに区別されており、この区別は正当なものである。しかし、これら二つの部門の違いとその関係については、きわめて異なったしかたで考えることができる。ケインズ氏によれば、妥当な演繹的論証と帰納的論証とは根本的に似たものである。どちらもその前提と帰結との論理的関係によって正当化されるのであり、違いはその正当化の度合いにすぎない。すでに説明したように、私はこの立場を採

8 F.P.ラムジー著・D.H.メラー編、伊藤・橋本訳（1996）、79頁。

9 同上書、84頁。

10 同上書、112頁。

ることはできない。」<sup>11</sup>

そして、演繹と帰納の本質的な違いについて次のように述べている。

「決定的な論理的論証（conclusive logical arguments）に関しては、私はその妥当性について多くの権威が与えてきた説明を受け入れることができる。それは、カント、ドゥ・モーガン、パース、ウィトゲンシュタインにおいて、実質的に同じものとして見出される。これらの著者たちはいずれも、形式的に妥当な論証の結論はその前提のうちに含まれていること、前提を受け入れながら結論を否定することは自己矛盾であること、形式的演繹は我々の知識を増やすものではなく、我々がすでに別のかたちで知っていることを明晰に浮彫にするに過ぎないということ、我々は自分自身にたいして不整合とならずにはその妥当性を受け入れざるをえないということ、について一致している。推論を正当化する論理的関係とは、結論の意味あるいは意義が、その前提の意味に含まれているということである。

しかしながら、帰納的論証の場合には、このようなことは少しも生じてはいない。これを演繹的論証に似ながら、ただその度合いにおいて弱いもの、とすることは不可能である。そこではその結論の意味がその前提の意味に部分的に含まれている、と言うのは馬鹿げている。我々はその前提を受け入れても、何らかの不整合や矛盾なしにその結論をまったく否定するということができるのである。

それゆえ、私が思うには、論証は根本的に異なった二種類のものに分けることができる。我々はこれを、パースの用語を使って、（一）「解明的、分析的、演繹的（explicative, analytic, deductive）」なものと、（二）「拡張的、総合的、（ゆるい意味での）帰納的（amplificative, synthetic, inductive）」なものの、二つとして区別できる。第二の種類論証は、一つの重要な観点からして、演繹的論証よりも、むしろ記憶や知覚にずっと似たものとみなすことができる。知覚、記憶、帰納は、知識を獲得する三つの根本的な方法とみなすことができる。演繹はこれに対して、我々の知識を並べ替え、その不整合性や矛盾を除去する方法にすぎない。」<sup>12</sup>

そのうえで、演繹は「より狭い論理学」、帰納は「より広い論理学」と論じた。

11 同上書、115頁。

12 同上書、115-116頁。太字は筆者。

「したがって、論理学はきわめて画然と二つの部分に分けられることになる(分析的論理学、すなわちタームと命題の理論は除く)。我々は一方に、より狭い論理学をもち、これは整合性の論理学、あるいは形式論理学である。我々は他方に、より広い論理学をもち、これは発見の論理学、あるいは帰納的論理学である。」<sup>13</sup>

このように、ラムジーは演繹と帰納の違いについて明快に説明した後、第三節で提示した確率の「整合性の理論」は演繹的推論と同様に形式的な一貫性を保つが、「しかし、その一般化の過程において、形式論理のもっとも重要な側面の一つが失われているのである」<sup>14</sup>とし、そのため、「それが合理的であるかどうかという問題は、私が広い論理学と呼んだものに依存しており、私はこれを次節の主題とする。」<sup>15</sup>としながら、蓋然的信念を確実な知識との演繹的關係のみによって正当化しようとしたケインズの方法について批判を行った。

第五節では、「整合性の論理」とは独立に考えられる「真理の論理」或いは「人間の論理」というものの可能性を説明しながら、「有用性」というプラグマティズムの視点から帰納的推論の正当化を試みている。

以上から分かるように、ラムジーはケインズの①「確率－関係」としての確率概念、②確率の主観性と客観性をめぐる曖昧な不整合性、③確率論における演繹的な帰納の正当化の方法論などについて根本的な批判を行った。ラムジーは、帰納法を「より広い論理学」と見据えた、いわゆる「人間の論理」の立場から知識と信念について論じながら、その推論のプロセスにおいて合理性と客観性を追求したが、それは実はケインズが目指したのもでもあった。

このようなラムジーの確率解釈の理論について、伊藤(1999)は次のように評価している。

「さて、以上のようなラムジーの確率解釈は、現在では一般に「確率に関する主観説 (subjective theory of probability)」と呼ばれるものであり、とくにこの解釈を導出するさいに彼が用いた「賭け」の議論が、その後のフォン・ノイマンとモルゲンシュテルンの「ゲーム理論」における効用測度の公理化や、サヴェッジの「意思決定理論」における確率測度の公理化の試みの発表とともに、これらに共通の先駆的理論として再発見されることになる」と、むしろこれらよりも洗練

13 同上書、116頁。

14 同上書、117頁。

15 同上書、121頁。

されたものとして評価されるようになった。さらにこの意思決定の合理性の根拠づけと、古典的確率算における「ベイズ・ラプラスの定理」の組み合わせによって、仮設の検証に関する一つのモデルが構築できることが主張されるにおよんで（いわゆる「ベイズ主義の検証理論」）、ラムジーは皮肉なことに、現代に復活した科学方法論としてのベイズ主義の元祖とさえみなされるようになった。]<sup>16</sup>

#### IV 『一般理論』というマクロ経済モデルのエッセンス

このようなラムジーの批判に対して、ケインズは「哲学者としてのラムゼー」（1931）の中で、次のように述べている。

「ラムゼーは、私の提出した見解に反対して、確率は命題の間の客観的關係にかかわるのではなく、（ある意味で）確信<sup>ビリーフ</sup>の度合いにかかわるものであることを主張し、そして彼は、確率の計算は単に、われわれの抱く確信の度合いの体系が、首尾一貫した体系となることを保証するための一組の規則に帰着する、ということ<sup>を</sup>を明らかにするのに成功した。かくして、確率の計算は形式論理学に属している。しかしわれわれの確信の度合い — あるいは先験的確率と呼び習わされているもの — の基礎は、われわれの人間の装備の一部であり、おそらくは単に自然淘汰によって与えられ、形式論理学よりもむしろわれわれの知覚や記憶に類似した装備に他ならない。ここまでは私はラムゼーに承服する — 私は彼が正しいと考える。けれども、「合理的な」信念の度合いと確信一般とを区別しようとした点では、彼はいまだ完全には成功していなかったと思う。」<sup>17</sup>

すなわち、ケインズはラムジーの批判に対して基本的に「承服」しているが、他方、彼の「合理的な」信念の度合いには未完成の部分が残っていることも論じた。

また、「若き日の信条」において、ケインズは若い時代の自分が、人性の合理性に信をおきすぎていたと何度も反省している。

このように、『確率論』の認識論や方法論への反省を踏まえて、ケインズは1936年に『一般理論』というマクロ経済モデルを提示した。

ケインズが『一般理論』を執筆した当時の主流派経済学は市場メカニズムを基盤とした古典派経済学であり、「セイの法則」と自由放任主義を主張した。それによ

16 伊藤（1999）、161-162頁。

17 ケインズ著・大野訳（1980）、448頁。太字は筆者。

ると、供給は需要を創出し、賃金の伸縮的な価格メカニズムにより、常に雇用は完全雇用水準に達する。失業はあくまでの一時的な摩擦的な失業にすぎない。

それに対して、ケインズは大量に存在する非自発的失業に注目し、失業を説明するための理論的構築を行い、完全雇用を達成するための経済政策を考案した。

ケインズは失業が一時的な現象ではなく、長期間持続している現象であることを説明するために、消費性向、資本の限界効率、流動性選好という三つの基本的な概念を提示した。

古典派経済学においては、完全競争の前提での代表的個人の長期的合理的行動が仮定されているが、ケインズは市場経済では不確実性が本質的に内在していると見ていた。人々は将来に対する不安より、貨幣を手元に保有したがるわけであるが、その傾向をケインズは「流動性選好」と概念化し、分析の出発点とした。

まずは、民間部門の流動性選好によって決まる貨幣需要と中央銀行により提供される貨幣供給量によって利子率が決定される。

次に、この利子率と資本の限界効率のバランスで経済全体の投資支出が決定される。

そして、消費性向による消費支出と上記の投資支出の合計が経済全体の有効需要を決定し、それによって産出と雇用量が決まる。

このように決まった雇用量は常に完全雇用量を下回る。何故ならば、市場経済における不確実性のため、人々は将来に対する不安より、貨幣を手元に保有しようとしており、その結果、消費と設備投資が抑制される。

『一般理論』におけるケインズの政策提言をまとめると次のとおりとなる。

#### 1. 「アニマルスピリット」による積極的な（投資）活動。

それは「数量的確率を乗じた数量的利益の加重平均の結果として行われる」合理的なものではなく、「不活動よりもむしろ活動を欲する自生的衝動の結果としてのみ行われるもの」である<sup>18</sup>。

#### 2. 政府の積極的な役割。

民間部門の投資決定の主な原因は将来の経済状況に対する期待であるので、政府は民間の投資家が将来の経済状況にポジティブになれるような明るい雰囲気や基礎条件を整備すべきである。あるいは、それでも有効需要が足りないならば、政府が直接公共事業で投資を増やすと、乗数効果で総雇用は大きく増える。但し、完全雇用が実現できて、それ以上投資を増やすと物価が上がるだけとなる。

18 ケインズ著・塩野谷訳（1983）、159-160頁。太字は筆者。

『一般理論』の膨大な原稿の翻訳というご苦勞の末に、塩野谷（1983）は「訳者あとがき」にて、ケインズ思想と方法論について次のようにコンパクトにまとめている。

「ケインズの古典派批判を主導した着想は、象徴的にいえば、第一の世界において古典派のベンサム<sup>19</sup>的功利計算の手法を否定することであり、第二の世界において古典派のセイ<sup>20</sup>の法則を否定することであった。ベンサム<sup>19</sup>的計算は行為の将来における帰結を保険数学的に計算可能とみるものであり、無知や不確実性を排除する考え方である。セイ<sup>20</sup>の法則は供給はそれみずからの需要を創造するとみなし、全体としての産出量を決定する需要理論の必要性を認めない考え方である。

ケインズはこれらの古典派的伝統を否定して、新しい理論モデルを構築しようとした。彼は経済学はモデルにそくして考える科学と、現実世界に適合したモデルを選ぶ技巧（art）との結合したものであると述べたことがある。そして優れたモデルを選ぶことは、本質的なものをつかむ直覚と、歴史的現実の注意深い観察によって可能であった。『一般理論』がしばしば難解であるといわれるのは、それが単なる形式的理論モデルではなく、現実的モデルを構築するための思想的営為の記録であったからである。」<sup>19</sup>

すなわち、ケインズの『一般理論』をまとめると、次のようなキーワードとなる。

- ①「無知や不確実性」（前提条件）、②「経済学は科学と同時に芸術が結合したもの」（モラルサイエンス）、③「本質的なものをつかむ直覚」（アニマルスピリット）、④「単なる形式的理論モデルではなく、現実的なモデルの構築」（リアリティ）。

最終章である第二四章の「一般理論の導く社会哲学に関する結論的覚書」において、ケインズは完全雇用を実現するためには、「投資のやや広範な社会化が完全雇用に近い状態を確保する唯一の方法になるだろうと」考えたが、他方では、「国家が引き受けるべき重要な仕事は生産手段の所有ではない」<sup>20</sup>とはっきり述べている。古典派経済学が標榜する「効率と自由」の有効性についても十分に認めながら、完全雇用を達成するために、「効率と自由を保持しながら病弊を治療することは、問題の正しい分析によって可能となるであろう。」<sup>21</sup>と主張した。すなわち、ケインズは「社会主義」とか「資本主義」とかのイデオロギーに拘らず、資本主義におけ

19 同上書、422頁。太字は筆者。

20 同上書、380-381頁。

21 同上書、384頁。太字は筆者。

る市場メカニズムの有効性を生かしながら、その病弊を治療するための現実的で中庸的な経済処方箋を模索したわけであった。

市場経済における前提条件は「不確実性」で、結論は「アニマルスピリット」であるというのが筆者の『一般理論』に対する総合的結論であるが、それは人間の合理性の限界への再考であり、自然的存在としての人間の自然への回帰にほかならない。

ケインズと同じ世紀を生き、主流派経済学に異議を唱えたシュンペーターは、ケインズの「アニマルスピリット」の概念に類似した「創造的破壊」あるいは「イノベーション」を唱えて、それは科学者の偶然の発見によるものではなく、資本主義システムの中から必然的に発生してくるものとして捉え、それこそ資本主義市場経済の本質であると主張した。

## V おわりに：ケインズの認識論における理性（釈迦の手のひらの悟空）と衝動（アニマルスピリット）

幸運にも、2011年秋からロンドン大学にて1年間客員研究という自由な時間に恵まれたことがある。子供の教育の関係で日本人が密集するウェスト・アクトンエリアに住居を決めたが、ウェスト・アクトンカウンシル（地方自治体）に住居登録をすると、その最寄りの担当のGP（General Practitioner）という、かかりつけのファミリードクターの登録をしてくれた。体調不良で1回電話予約後、診察してもらったことがあるが、診察料・医療費がすべて無料でびっくりしたことがある。イギリスの医療制度NHS（National Health Service）を知るきっかけになったわけであるが、その制度の設立にはケインズの功労が大きいと宇沢（2013）は指摘している<sup>22</sup>。他方、このようなサービスを受けながら、このような社会福祉制度は本当に持続可能であるかの疑問もあった。

ケインズのもっとも強力なライバルの一人であったハイエクは『隷属への道』で、次のように述べながら、いくら善意から始めた社会福祉政策でも結果的に貧困者の選択の自由や自立を奪うことになり、選択の多様性こそが未知の世界への発展を保証すると主張した。

「政治的自由は経済的自由なしでは意味がない、とよく言われる。このことは

---

22 宇沢（2013）、46-54頁。

まったく正しい——ただし、計画主義者たちが言っているのとはまったく逆の意味でのことである。経済的自由は、他のどんな自由にも先立つ前提条件であるが、社会主義者が約束するような「経済的心配からの自由」とはまったく異なっている。後者の自由とは、個人を欠乏から遠ざけると同時に選択の権利からも遠ざけることによって初めて獲得しうるものである。そうではなく、経済的自由とは、経済活動の自由でなければならない。もちろんそれは、選択の権利をもたらすとともに、それにとまなう危険や損失、そして責任を、個人に課してくるのだが。』<sup>23</sup>

しかし、1946年に62歳のケインズがなくなった際に、ハイエクはケインズの妻に手紙を送り、ケインズのことを次のように述べた。

「私が知っているなかでただひとりの真に偉大な人物であり、限りない尊敬の対象だった。彼のいない世界ははるかに色あせたものになってしまうだろう」<sup>24</sup>

モラルサイエンティストとしてのケインズは自分の師匠であるマーシャルとは全く違う方向の経済学の道印を示していたが、自分の『確率論』の論敵であったラムジューを「われわれの世代に属する最も聡明な人物」とであると称賛したり、逆に『一般理論』の最強のライバルであったハイエクからは「真に偉大な人物」とであると評価を受けたりしたわけである。

『本の中の世界』で湯川秀樹博士は人間と自然について次のように述べている。

「自然は曲線を創り人間は直線を創る。往復の車中から窓外の景色をぼんやり眺めてみると、不意にこんな言葉が頭に浮ぶ。遠近の丘陵の輪郭、草木の枝の一本々々、葉の一枚々々の末に至るまで、無数の線や面が錯綜してゐるが、その中に一つとして真直な線や完全に平らな面はない。これに反して田園は直線をもって区画され、その間に点綴されてゐる人家の屋根、壁等の全てが直線と平面とを基調とした図形である。

自然界には何故曲線ばかりが現はれるか。その理由は簡単である。特別の理由なくして、偶然に直線が実現される確率は、その他の一般の曲線が実現される確率に比して無限に小さいからである。しからば人間は何故に直線を選ぶか。それが最も簡単な規則に従ふといふ意味において、取扱ひに最も便利だからである。

23 F・ハイエク著・西山訳（1992）、127-128頁。

24 ニコラス・ワプショット著・久保訳（2012）、237頁。

自然の創造物である人間の肉体もまた複雑微妙な曲線から構成されてゐる。併し人間の精神は却つて自然の奥深く探求することによって、その曲線的な外貌の中に潜む直線的な骨格を発見した。実際今日知られてゐる自然法則の殆んど全部は、何等かの意味において直線的なものである。しかし更に奥深く進めば再び直線的でない自然の神髄に触れるのではなからうか。こゝに一つの問題、特に理論物理学の今後の問題があるのではなからうか」<sup>25</sup>

本質的に考えてみれば、直線は曲線の一部であり、曲線という大局の視点からすれば、直線と曲線は不二の関係にある。

「直線」という演繹的論理を用いて、人間は壮大な知識体系を構築してきた。しかし、ラムジーがすでに指摘したように「形式的演繹は我々の知識を増やすものではなく、我々がすでに別のかたちで知っていることを明晰に浮彫にするに過ぎない」。人間が使う数学は形式論理（同一律、矛盾律、排中律）の形をとるので、結論は単純明瞭である。しかし、排中律は確実性を要求しているので、本質的に不確実性を内包している自然への近似は可能であっても、本質的な把握は不可能である。理性と科学の限界である。孫悟空が筋斗雲に乗っていくら一瞬にして10万8,000里飛べるにしても、「釈迦の手のひら」から飛び出すことができない所以である。

他方、芸術家たちは自然と一体になって絵を描いたりしているが、その絵の中には自然の躍動が秘かに息をしているものもある。

社会科学者ケインズと自然科学者湯川博士は異なる表現を用いて、人間と自然に対する自分たちの理解を表明したわけであるが、それはやはり「窮理尽性以至於命」（理を窮め、性を尽くして以て命に至る：人間の行為の自然との調和）という目標への異曲同工のものであったと思われる。

それでは、ラムジーの「人間論理」やケインズの「アニマルスピリット」というのは結局どういうものだろうか。その答えはやはり「若き日の信条」に凝縮されていると思われる。

「ところで、われわれがムーアから得たものは、彼がわれわれに提供したもののすべてであったわけでは決してない。彼は片足を新しい天国の敷居にかけていたが、もう一方の足はシジウィックと、ベンサム主義の功利計算と、正しい行動の一般法則との中に突っ込んでいた。」<sup>26</sup>

25 湯川（1963）、177-178頁。太字は筆者。

26 ケインズ著・大野訳（1980）、569頁。

すなわち、ベンサム主義の頻度主義的狭い論理的計算については批判しながら、「ルネサンスの幕あき、新しい地上における新しい天国の出現」であった、ムーアの有機的統一の原理については「常に一貫して」主張すると表明し、「私には今でもそれだけが理に適ったものに思われる」と述べていた。そして、その有機的統一の原理については次のように具体的に述べている。

「熱烈な観照と交わりとにふさわしい主題は、最愛の人、美、および真理であり、人生における主たる目的は、愛であり、美的体験の創造と享受であり、そして知識の追求であった。」<sup>27</sup>

同時に、ケインズは、「権力、政治、成功、富、野心も脱落し」、「ベンサム主義の伝統こそ、近代文明の内部をむしろ、その現在の道徳的荒廃に対して責めを負うべき蛆虫であると考えられるものである。」<sup>28</sup>と述べながら、「人間の本性を合理的なものに見なしたことは、今にして思えば、人間性を豊かにするどころか、むしろ不毛なものにしたようである」<sup>29</sup>と若き日の自分を反省している。

いよいよ本稿の結論をまとめると、次のとおりとなる。

人間はやはり、社会的存在として「直線」を創りながら仕事をしなければならない。しかし、それは単なる形式論理の合理性を内在した静的な直線だけでなく、人間の気まぐれや直観、慣習的道徳や伝統的智慧などの有機的な不確実性の関係をも内在した動的な曲線でもある。

自然的存在としての人間にとって、不確実性は必然的なものであり、避けて通ることはできない。何故ならば、自然は常に躍動しているからである。しかし、社会的な存在としての人間にはやはり選択の自由があると思われる。不確実性を合理的にとらえると、流動性の罠に陥り不況に直面するわけであるが、直観的にとらえ、自発的なアニマルスピリットで活動すると新しい何かが生まれてくるだろう。

合理性を土台としたデジタル技術の進展によって、AIや深層学習を活用した集合知が脚光を浴びている現代において、ちょっと立ち止まって「一人の人間が持つ知性がどんな意味を持ち、イノベーションの種を内蔵した不確実性とどう付き合うべきか」を考える際に、「アニマルスピリット」というケインズのアナログ的洞察は、依然として大変重要な意義を持っているかもしれない。

27 同上書、570頁。太字は筆者。

28 同上書、580-581頁。太字は筆者。

29 同上書、584-585頁。太字は筆者。

### 参考文献

- 伊藤邦武（1999、オンデマンド版2015）『ケインズの哲学』、岩波書店。
- 尹清洙（2016）「アダム・スミスから見る中国の儒道佛思想」『長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）』第50巻第3号。
- 宇沢弘文（2013、第8刷2015）『経済学は人びとを幸福にできるか』、東洋経済新報社。
- 大塚淳（2020）『統計学を哲学する』、名古屋大学出版会。
- ケインズ著・大野忠男訳（1980）『ケインズ全集第10巻 人物評伝』、東洋経済新報社。
- ケインズ著・佐藤隆三訳（2010）『ケインズ全集第8巻 確率論』、東洋経済新報社。
- ケインズ著・塩野谷訳（1983）『ケインズ全集第7巻 雇用・利子および貨幣の一般理論』、東洋経済新報社。
- ティモシー・チルダーズ著・芦屋雄高訳（2020）『確率と哲学』、九夏社。
- D.ギリース著・中山智香子訳（2004）『確率の哲学理論』、日本経済評論社。
- ニコラス・ワプショット著・久保恵美子訳（2012）『ケインズかハイエクかー資本主義を動かした世紀の対決』、新潮社。
- F・ハイエク著・西山千明訳（1992、第二刷1993）『隷属への道』、春秋社。
- F.P.ラムジー著・D.H.メラー編、伊藤邦武・橋本康二訳（1996、第2刷2009）『ラムジー哲学論文集』、勁草書房。
- 山崎弘之（1988）「ケインズ『一般理論』における主観主義（五）－『確率論』をめぐって－」『国士館大学政経論叢』第66号。
- 湯川秀樹（1963、第27刷2006）『本の中の世界』、岩波書店。